

# 一個人として歴史を書くということ

## On Writing History as an Individual

益田 肇

MASUDA Hajimu

シンガポール国立大学歴史学部

National University of Singapore, Department of History

### キーワード

冷戦 普通の人びと 社会戦争 叙述形式 東アジア/アメリカ史

### Keywords

The Cold War; Ordinary people; Social warfare; Narrative style; East Asian/American history

*Quadrante*, No.24 (2022), pp.157–171.

### 目次

1. 方法論的背景：なぜ叙述形式なのか
2. 叙述形式の特徴と利点
3. なぜ「階級闘争」と言わないのか
4. 史料を集め方・読み方について
5. 他の地域についてはどうか：ソ連
6. 他の地域についてはどうか：韓国
7. 味方でなければ敵なのか
8. 「総力戦世界」と「冷戦世界」
9. 解釈上の相違：中国、台湾、韓国
10. 沈黙した人びとをどう描くのか
11. おわりに：個人として歴史を書く

この度は拙著『人びとのなかの冷戦世界：想像が現実となる時』(岩波書店、2021)の書評コロキウムを企画していただき、ありがとうございます。私は、学生時代は真面目な学生ではなかったし、日本では大学院には行っていない。だからこれまで日本の学术界とはあまり接触がなかった。そうした者に今回のような議論の場を設けていただき、また、新たな

出会いをつくっていただけて深く感謝している。ここでは、書評コロキウムで争点となった事柄を振り返りつつ、戸邊秀明さん、渡辺直紀さん、藤井豪さんの書評に応えていきたい。

### 1. 方法論的背景：なぜ叙述形式なのか

戸邊秀明さんには、提題者のトップバッターとして本書を各章ごとに紹介いただいたうえ、本書の意義を4点に分けて解説し、いくつもの重要な論点を提示するという多大な労を取っていただいたことに深く感謝したい。こうしたことは、本書にじっくりと取り組まねばできないことで、相当な時間をかけていただいたことだと思ふ。

戸邊さんの掲げた問いの一つに、本書にまつわる知的系譜・知的抗争の文脈を問うものがあった。これまでにも、モンゴルや中東諸国での自転車旅行の経験や新聞記者としての経験がどのように本書の問題意識に繋がっているかを述べたことがあり<sup>1</sup>、また本書のもととなった博士論文がコーネル大学大学院で、どのよう

<sup>1</sup> 益田肇「大佛次郎論壇賞を受賞して」『朝日新聞』2022年1月26日付夕刊。



に始まり、どのように展開したかについても既に書いたことがある<sup>2</sup>。そこで、ここでは、戸邊さんがまず取り上げた本書の叙事的な書き方そのものとその背景について少し考えてみたい。

もちろんこの叙述という方法——つまり、写実的なまでに物事の推移を逐一叙述していくというやり方——に関しては、新聞記者としてキャリアの第一歩を踏み出していたという私の経験が強い影響を与えていることは言うまでもない。また、学生の頃から、辺見庸、斎藤茂男、鎌田慧、立花隆、沢木耕太郎、デイヴィッド・ハルバースタムなどといった、ジャーナリストないしはノンフィクションライターの本を好んで読んでいたことも何らかの関係があると思う。

ただ、本書にとって、より決定的な意味を持ったのは、そのもととなる博士論文が<sup>3</sup>アメリカ史の研究として始まっていたこと、また、指導教官にフレドリック・ログヴァル (Fredrik Logevall) を持っていたことだったと思う。

そもそも一般的に言って、英語圏における歴史学、とくにアメリカにおけるアメリカ史研究には、叙述の伝統とでもいうべき流れがある。例えば、南北戦争の歴史であっても、市民権運動の歴史であっても、冷戦史であっても、叙述を通して歴史が描かれ、論じられることが多い(興味深いことに、この傾向は、アメリカにおける日本史研究には、ジョン・ダワーを除いて、あまり当てはまらない)。

ログヴァルは、そうした傾向を持つアメリカ史家のなかでも、とりわけその傾向の強い歴史家だった。一度、ログヴァルに、どんな本に影響を受けたか、という話を聞いたことがある。そこで彼が挙げたのは、ピューリッツァー賞受賞作でもあるバーバラ・タックマン『八月の砲声』(1962)。ここからも彼の叙述への敬意を見

て取ることができるだろう。

そして、そのログヴァルが、私の在学時にあたる2005年から2011年までの間に執筆していたのが、*Embers of War: The Fall of an Empire and the Making of America's Vietnam* (2012)。この本は、彼の前著 *Choosing War: The Lost Chance for Peace and the Escalation of War in Vietnam* (1999) が1963年から1965年に焦点をあてて、リンドン・B・ジョンソン大統領の北爆決定過程を分析したものだったのに対し、その前史、つまり1940年ごろから1960年までの期間に焦点を当てて、米国がどのようにしてインドシナ半島への介入の度合いを強めていったかを描いたものだ。

ログヴァルは一度、この本の一章を、コーネル大学歴史学部のアメリカ史コロキウムに持ってきて論じたことがある。その章——のちに出版された本では第16章——は、次のような情景描写から始まる。

The village was set a third of the way down a heart-shaped basin measuring eleven miles in length and seven miles across at its widest point. It was surrounded by mountains, some round and gentle, others sharp limestone masses rising in irregular tiers to pointed peaks. A small river, the Nam Youm, ran past the village, through the plain from north to south. Although flat, the basin contained small features that sprouted up here and there, and there were numerous tiny hamlets and isolated dwellings scattered about. The inhabitants, perhaps ten thousand

<sup>2</sup> 益田肇「人びとのなかの冷戦：想像がグローバルな現実となるとき」『立命館国際研究』31:5, 2019。

<sup>3</sup> Masuda Hajimu, "Whispering Gallery: War and Society during the Korean Conflict and the Social Constitution of the Cold War, 1945-1953," Cornell University, 2012.

total, were mostly ethnic Tai who grew rice and mangoes and oranges on the fertile plain and marketed the opium brought down from the mountains by Hmong tribes, but there were also other tribal groups and Vietnamese. The Tai called the place Muong Thanh. To the Vietnamese, and to the French, it was known as Dien Bien Phu.<sup>4</sup>

やや長い引用となったが、本の雰囲気伝わってくると思う。この864頁に及ぶ大著は、2013年ピューリッツァー賞を受賞。その後、ログヴァルはハーバード大学に移り、現在は、ジョン・F・ケネディの伝記を書いている。ケネディの伝記といえば、まっさきにアーサー・シュレジンジャー Jr.の『ケネディ 栄光と苦悩の一千日』（1966）が思い浮かぶが、ログヴァルが描くケネディ像は、基本的にはインサイダーのシュレジンジャーが描いたものとは異なるものとなるだろう。すでに816頁に及ぶ上巻が2020年に上梓されており、今年はじめのメールによると、今は下巻を執筆中とのことだった。

このように叙述への敬意が比較的強いアメリカ史の学术界で拙著のもととなる博士論文を書いたこと、また特にそれをログヴァルのもとで書くことができたことは、私にとって幸運だったと思う。ただ、コーネル大学に行ったがためにそうした叙述形式の影響を受けた、というわけではない。そもそも、私にとっては、そうした書きの方がむしろ自然だった。同大学院への出願書も、私が自転車旅行中にイスラエル兵に囲まれて銃を突きつけられるシーンから始めたぐらいだ（いくらアメリカでも大学院への出願書を情景描写から始める人はあまりいない）。それがたまたま叙述体を好むログヴァルの目に止

まり、そのため私はコーネル大学大学院で自分なりの文体をより発展させ、それを歴史研究と組み合わせることができたのだと思う。

日本では、歴史学者によって書かれる論証的な歴史と、ジャーナリストやノンフィクションライターによって書かれる叙述的な歴史との間に、かなり高い壁がそびえ立っているような印象がある。しかも、先に挙げた辺見庸や沢木耕太郎、また昭和史研究で名高い保阪正康や、今回、大佛次郎賞を受けた堀川恵子のようなスター級著者による作品を除けば、ノンフィクション作品として書かれた叙述的歴史研究への敬意が比較的低いように思われる。両者がそれぞれ学びあえば、それぞれ学ぶものが多いはずなのに、と思う。

ただ、一般的に言って、歴史家というものは（特に叙述体の歴史を書く著者は）、自らの方法論を事細かに展開することをあまり好まない。米国外交史研究の大家にジョン・ルイス・ギャディスという歴史家がいるが、彼は次のように書いたことがある。

歴史家の仕事はかなり多様であるが、なかでもとりわけ形式に機能が隠れることを好む。自分の書いているものが、たとえばパリのポンピドゥー・センターのように、エスカレーターや配管、配線やダクトが誰にでも見えるように建物の外側に配置されている設計を模倣するなど、考えただけでも後退りしてしまう。そのような構造物の必要性が疑問なのではなく、見せびらかそうとする衝動を疑問視するのだ<sup>5</sup>。

ギャディスといえば、拙著の立場からすれば、論敵の筆頭ともいえる歴史家だが、文体のスタイル——彼が冗談めかして「反ポンピドゥー・セ

<sup>4</sup> Fredrik Logevall, *Embers of War: The Fall of an Empire and the Making of America's Vietnam* (2012), 381.

<sup>5</sup> ジョン・ルイス・ギャディス『歴史の風景 歴史家はどのように過去を描くのか』（2004）xi-xii,



ンターの美学」と呼ぶ態度——については、かなり共感を覚える。とはいえ、ギャディスもそう認めるように、そうしたやり方を続けるだけでは、歴史家が何をしているのか分からず、ただ混乱を招いてしまうことになる。

## 2. 叙述形式の特徴と利点

そこでここでは若干、寄り道ながらも、本書がとった叙述という形式について、その特徴と利点を考えてみたい。その最大の特徴は、戸邊さんが指摘したように、方法論を「生で」論じずに、それを叙述で表現していくという点にある。言い換えれば、叙述的な歴史においては、議論とは、いわゆる「正典」への参照によって組み立てられるものではなく、むしろ文中の個々のエピソードを通して徐々に浮かび上がってくるものだ。戸邊さんは、本書がそれを「見事に昇華している」と述べてくださっており、我が意を得たりと感じた。

ただ、そうした叙述的な歴史は、もちろん幅広い読者層へアピールしやすいという利点はあるものの、一般的に言って、物事の描写に行数がかさむため本が分厚くなりやすいし、その議論が描写を通して展開するため、通読するまで全体像がつかみにくい傾向にある（そうした本は一般に序論が短く、各章がそれぞれ長い）。

それにも関わらず、そうした叙述形式が私のような歴史家に好まれつづけるというのは、それが「社会で起きていたことを次々と描写することから、それが何なのかを考える」という、一種、帰納法的な議論の立て方に向いているからだと思う。それは、「まずコンセプトを設定して、それでもって社会を分析していこう」とする、いわば演繹法的な議論の進め方とは本質的に順序が異なる。前者の利点は、「コンセプト」という何らかの枠組みからこぼれ落ちてしまうような細々とした多様な経験を拾い集めていく

ことができること、そしてそうした現場で起きている細々とした事柄を総合的に検討することで自分なりのコンセプトを生み出していくことができる点だと思う。

それゆえだろう。実際、拙著では、「ナショナリズム」「コロニアリズム」「ポストコロニアル」「階級闘争」「自由主義（または新自由主義）」「総力戦体制論」「民族主義」「国家主義」「国民国家」などといった既存のコンセプトはあまり使われていない。もちろん「草の根保守」「保守的」「総力戦」などのように、一般名詞として、もしくは常識的な意味での形容詞としてこうした用語を使うことはあっても、「誰々が言うところの何々」といった固有名詞付きのコンセプトは、むしろ極力、使わないようにしてきたように思う。なぜか——。

それは、そういったコンセプトを使うことで、その社会で何が起きていたのかを、見るまえに決めつけてしまうことを恐れるからだ。本書第1章でも論じたように、「名前をつける」という行為には、それが何であるのかを考え続けようとする営みをとめてしまう作用があるように思われる。逆に言えば、「名前」を付けない、つまり、厳密に定義しすぎないほうが、それが何であるのかを考え続ける回路が残されることになる。

つまり、本書は、「ナショナリズム」という用語を使わないで、そうと見なされがちな事柄を考え直す試み、また「コロニアリズム」という用語を使わないで、そうと見なされてきた物事を見つめ直す試み、と言えなくもない。本書で最もその立場がよく現れているのは、もちろん冷戦世界の分析で、「冷戦」という枠組みから見なされてきた出来事を、当時社会で起きていたことから考えなおし、そうすることで冷戦世界そのものを見直そう、という視点に現れている。それが、本書の言うところの「社会で何が起きているかを描写することからそれが何なのかを

考える」ということであり、それを可能にするのが叙述形式の歴史、ということになる。

ただ、こうしたやり方は、コンセプトを使い慣れた研究者には、もどかしく感じられるようだ。それは、藤井さんのコメントに如実に現れているが、そうした反応をいただくのは初めてではなかった。2006～2007年頃、コーネル大学歴史学部の東アジアコロキウムで発表したときに、酒井直樹さんが来てくれたことがある。これは、拙著第4章のもととなる論文を発表した場だったが、酒井さんはどうして私が中国共産党政権によるナショナリズムの発揚として描かないのか不思議がっていたように思う。私に言わせれば、そうしてしまえば、個々人のさまざまな体験——つまり、熱狂であったり、不信感であったり、また無関心であったり——が、描けなくなるよう思われた（今となって振り返ってみれば、当時もう少し余力があれば、彼からもっと学べることもあっただろうと残念に思う）。

### 3. なぜ「階級闘争」と言わないのか

同じようなことは、本書がなぜ「階級闘争」という枠組みをまったく使わないか、という点にも繋がっていると思う。藤井さんは、「社会の歴史は階級闘争の歴史である」という『共産党宣言』（1848）の冒頭の文句を紹介し、そうした観点から社会を捉える姿勢が本書には希薄すぎると批判したが、それもそのはずで、そもそも本書はそういう立場から書かれたものではない。私に言わせれば、本書はそうした一定の枠組みから社会を見ることを避けて、むしろ「社会で何が起きているかを描写することからそれが何なのかを考える」という試みだったのだから。

そもそも、私にとっては、「階級闘争」と言ってしまった途端、個々人の声が聞こえなくなり、それぞれなりの物語が消えてしまうような気がする。結局のところ、そうした視点は、多様な

人びとの経験を「資本家」や「労働者」などといった括りにまとめてしまわざるを得ないからだ。

また、経済上の利害を根本的な尺度としてしまうことで、ほかのさまざまな軋轢——ジェンダー、人種、民族、宗教、移民、世代、習慣、文化などの違いをめぐる対立から個々人の感情的な対立まで——をむしろ見えにくくしてしまうように思う。さらに、「階級闘争」と言うと、それに関わるすべての人びとが何らかの意図をもって行動しているかのようで、意図せずに展開した出来事などを描きにくくなるようにも思う。

そこで、本書では「社会戦争」というコンセプトを打ち出してみた。これは、最初からこうした概念を持っていたわけではなく、各地の多様な出来事を拾い集めて分析しているうちに自ら作り出した、いわば手作りコンセプトだ。ただ、コンセプト系研究者にとってはおそらく苛立たしいことに、本書ではそれを厳密に定義したりせずに、むしろ一般名詞風に使い続けている。それは、上記で述べたように、厳密に定義しすぎないほうが、それが何なのかを物事の描写を続けることで、ゆっくりと考えていけるからだ。

それでも、大まかに言えば、それは、「調和や秩序のあり方をめぐる人びとの争い」ということになるだろう。だから、実は、「階級闘争」とも重なる点は少なくないはずだ。むしろ、そこからこぼれ落ちがちな多様な出来事をも含んだ、より包括的な概念だと思っている。ただ、筆者がイメージするのは、階層間（もしくはグループ間）の対立というよりは、たとえて言うならば、むしろ、人びとのなかの「牢屋番」と「脱獄囚」の終わりなきいちごっこに近いように思う。社会的、経済的、政治的に同じような階層、グループに属していても、そこには比較的、集団秩序と調和、またさまざまな「らしさ」を重んじる人びと（「牢屋番」）がいる一方、そうして築かれ

維持されてきた「壁」や「ボーダー」「規範」に収まりきらない、もしくはそこから抜け出ようとする人びと（「脱獄囚」）がいる、という具合だ。

それゆえに、戸邊さんの「どうして在日朝鮮人が登場しないのか」という問いかけは、きわめて真っ当だと思ったし、耳が痛かった。実際、在日朝鮮人をめぐる戦後期の軋轢ほど、「社会戦争」の事例にふさわしいものはないと今は思っている。もし在日朝鮮人を検討の範疇に入れていれば、本書第8章の日本セクションは、一つの章になっていただろう。ただ、それに気づくのがやや遅すぎた。それは、本書のもととなる博士論文が、そもそもはアメリカ史として始まり、中国史へと広がっていき、その後、ようやく日本の状況を考慮に入れるようになったという、走りながら考えていた当時の事情と関連している。

そもそも、その博士論文に日本を含める決断をしたのは、フランスで開かれたある国際学会に友人が出席できなくなり、たまたま私がピンチヒッターとして出席し、朝鮮戦争期の日本の政治、社会、文化について論じたからだ。その論文はのちに学術論文として本書とは別個に出版した<sup>6</sup>。この論文がなければ、のちに日本史家としてのポジションを得ることはなかっただろうし、また、この論文がなければ、日本で本書を出版することもなかったかもしれない。というのは、未だに面識はないものの、この論文を読んだテッサ・モーリス＝スズキさんが、『ひとびとの精神史 朝鮮の戦争』の執筆陣に私を加えてくださり、それゆえに日本の出版社との繋がりがはじめて生まれたからだ。

このように、本書リサーチ段階のかなり後の方になって日本史研究を取り込んだことは、戸邊さんが指摘するように、在日朝鮮人、また広くはポストコロニアル文脈全般への意識の薄さと

なって現れているのかもしれない。ただ、のちにこうした点に気づいたがゆえに、次作『社会戦争の時代 戦争と占領の社会経験から考える』（仮題）では、在日朝鮮人は、部落民や女性ともに、重要なフォーカスの一つとなっている。

#### 4. 史料を集め方・読み方について

こうした調査時における事情は、本書における韓国史や韓国政治に対する手薄さとしても現れていると思う。ただ、序論でも書いたように、本書は、朝鮮戦争そのものの歴史ではないし、戦後韓国史をつまびらかにしようとして書かれたものでもない。そのように明示したにもかかわらず、英語版では副題に「Korean Conflict」という単語が入っていたためか、同書は朝鮮史・韓国史の本と勘違いされて読まれることが多かった。これまで英語版に関しては、27本ほどの書評が書かれているが、そのうち3本ほどが否定的な書評で、それはいずれも朝鮮・韓国史家によって書かれたものだった。大まかにいって、中国史家やアメリカ史家、また社会学者や文学研究者らによって書かれた書評は、おしなべて好意的だったように思うが、朝鮮・韓国史研究者は、肯定派と否定派にぱっくりと二つに割れた。

渡辺さんが書評で言及するトッド・ヘンリーは、最も否定的な書評を書いたものの一人だ。参照するならもっとほかの書評を読んでもらえばよかったのに、と思わなくもない。このように本書が誤解されたまま読まれることにやや嫌気がさし、日本語版では「朝鮮戦争」という言葉をわざと副題から外した。できるだけ幅広い層に読まれてほしい、議論されてほしいと思ったからだ。朝鮮史・韓国史専門家だけでなく、アメリカ史家、日本史家、中国史家、また、「人びと」やその暴力に焦点を当てる他地域の専門家、さ

<sup>6</sup> Masuda Hajimu, "Fear of World War III: Social Politics of Re-armament and Peace Movements in Japan during the Korean War, 1950-53," *Journal of Contemporary History* 47:3 (July 2012), 551-571.



らには、さまざま草の根保守運動やポピュリズムの研究者などにも読んでほしいと思ったからだ。

それでも、この WINC 書評会でも、朝鮮・韓国専門家をメインにした評価が行われるというのは、おそらく、それだけ、朝鮮・韓国史研究者からの本書に対する期待感が高いからなのだろう(幻滅に終わってしまっていたら申し訳ないのだが)。ただ、実際、渡辺さんの書評を聞いて、やはり朝鮮語の勉強をもっと続けていけば、と悔やまないでもない(実際、大学院生の頃、一時期、延世大学校の語学コースに通っていたこともあった)。のちに簡単に触れるように、済州島4・3事件であれ、朝鮮戦争中のさまざまな虐殺事例であれ、冷戦論理というよりも、本書がいうところの「社会戦争」で検討できそうなものも少なくないからだ。

ただ、渡辺さんが、本書で使用した人びとの手紙や新聞の社説などについて、「あいまいな姿勢を正す主戦派の主張が多い」とし、「これらの社説・投書・手紙がそのまま政府を突き動かしたとみるのはやや短絡的ではないか」と述べられたことには、どうしてそのように受け止められたのかが不思議だった。というのは、本書では、主戦派だけでなくさまざまな異論も取り上げているし、そもそもそうした手紙が直接、政府を突き動かしたとは述べていないからだ。結論だけを抽出すればそう読めるかもしれないが、そこにたどり着くまでには随分さまざまなことを検討したつもりだ。

同様に、「慎重な政府」と「対照的な態度をとる社説・投書・手紙」を意図的に配置したと見られる恐れがある、との指摘にも、やや違和感がある。本書で示したのは、それぞれの政府のなかにも、慎重派と積極派の複数勢力があったこと、また、人びとのなかにもそうした分裂が存在したことだったからだ。この点に関し

ては、先日『週刊文春』に掲載された拙著の書評で、吉川浩満さんが、「本書が膨大な資料とともに描くのは、そうした国家と民衆の相互作用によって冷戦世界がつくられていったプロセスである」とした評のほうに本書の取り組みをよく表していると思う<sup>7</sup>。

おそらく、渡辺さんの史料の読み取り方をめぐるコメントは、むしろ、もう少し丁寧の一つ一つの史料を検討することはできないか、というリクエストだったのではないかと思う。たしかに、本書における史料の集め方、また扱い方は、一般的な歴史家のやり方とはかなり違う。おそらく、日本の歴史家、とくに実証主義的な歴史家であれば、一つ一つの史料に対して、それがどこの誰によって書かれたか、どのような状況下でその史料が作成されたか、また、どうしてその史料が今日まで保管されるに至ったかの力学まで考え、そして、その厳選された史料から何が言えるかを考えようとするだろう。

それに比べると、私の調査方法はかなり異なる。本書における調査では、私はまず時間軸をかなり短く設定して(大きくとって1945年から1953年ごろ、より集中的には1950年夏から1951年末までの18カ月間ほど)、その期間に該当する史料を手当たり次第、何万点も幅広く集めて、それをどんどん読んでいく、そしてそのなかからいくつかの傾向やこれまで言及されなかった繋がりなどを探り出して、その意味を考えていく、というものだった。ゆえに、本書で使用された史料は、同じような傾向を示す資料群の代表的なものに過ぎない。

おそらく、本書に出てくる史料は、集めたものの5%にも達しないと思う。読んだうえで収集しなかったものまで含めれば、実際に使われた史料は、なんらかの傾向を表す氷山の一角のようなものだ。そういう意味では、こうしたやり方は実証主義的歴史家のやり方というよりも、む

<sup>7</sup> 吉川浩満「私の読書日記 冷戦、ネットと社会、生活の練習」『週刊文春』(2022年2月3日号)、110頁。

しろビッグデータの分析にも似ているのではないか、と思う。つまり、一つ一つを精査してそのエビデンスとしての価値を判断するというよりは、とにかく量をこなすことで何らかの傾向なり特徴なりを読み取り、それによって当該史料の質を判断するというやり方になる。

## 5. 他の地域についてはどうか：ソ連

渡辺さんの問いかけでもう一つ興味深かったのは、本書が米国と中国を主な対象として行なったような分析を、他の地域、他の時期についても行えるのか、というものだった。渡辺さんはとくに同時期のソビエト連邦と朝鮮半島をその対象として挙げている。こうした質問は、私にとっては答えにくいものではあるものの、受けるのが楽しい質問でもある。これまでにも、フランスこそ分析対象に加えるべきだ、いやいや東西ドイツこそ含めるべきだ、はたまたインドネシアはどうだろう、とさまざまな提案がなされてきた。もちろん、ソ連と韓国は、常にそうした「調査すべきリスト」に名を連ねている。

事実、ソ連の国内政治と社会が、この朝鮮戦争期にどうなっていたのかという点は、私としても関心のあるテーマだった。実際、コーネル大学在学中、一度、ロシア語を取ったこともある。それは、朝鮮語の学習を一時中断した後のことだったが、やはり、中国語と英語との掛け持ちは難しかった。ただ、もしロシア語も使えて、ソ連国内の動きも論じることができれば、本書はもっといい本になっただろうと今でも思う。

実際のところ、二次文献で読むだけでもソ連国内でもやはり似たような動きがあったのではないか、と思えてくる。例えば、Elena Zubkova 著の *Russia After the War: Hopes, Illusions and Disappointments, 1945-1957* (1998) という興味深い本がある。同書などのこの種のテーマの本がまず指摘するのは第二次世界大戦の絶大なインパクトだ。

ソ連の若者にとってみれば、戦争はもちろん悲惨な体験だったにせよ、僻地から兵士として出征した若者にとってみれば、それはベルリンやパリの文化を生まれてはじめて目の当たりにするような衝撃的な体験でもあったらしい。とくに私にとって興味深かったのは、そうした戦地帰りの若者の間における「個人主義」の芽生えと「西洋化」への憧れ、そしてそれに対する批判の台頭があったということだ。

同時期のソ連は厳しい飢饉や食糧危機にも見舞われている。この頃には、勝利感が幻滅と苛立ちに変わって、そうしたなかで社会秩序や道徳の乱れ、さらには「利己主義」や「個人主義」的な若者の振る舞いが、非難されることになる。このように社会・文化秩序の悪化、また道徳観念の乱れなどが問題視されていたという点において、戦後ソ連社会も、実は、ほかの社会と共通することがあったように思われる。

興味深いことに、ソ連国内でも、1947～1952年にかけて、大規模な「反革命分子」パージが発生している。第二次世界大戦後の1945年から1953年までの間に、約60万人が粛清されたと言われているが、1930年代のいわゆる「大粛清」——とくに1937～1938年だけで80万人近くが粛清された大規模パージ——に関する先行研究に比べれば、第二次世界大戦後、とくに朝鮮戦争期のパージについてはあまり研究がない。

このソ連における1950年代のパージが、拙著の議論に繋がるかどうかは、調べてみないと分からない。ただ、前述した Elena Zubkova というロシアの歴史家は、ソ連社会への第二次大戦のインパクトをもっと重視すべきだと強調したうえで、1947～1953年のパージの再来を「社会的に危険とみなされた人びと」が犠牲になった「魔女狩り」と表現している。ただ、彼女の研究においても、それがいったいどのような人びとだったかは検討されてない。



この時期のページに関する二次文献が大量に存在すれば、少なくとも何らかの言及はできたように思うが、そもそもこの時期に焦点をあてた研究が少ない。さらに、英語文献でも日本語文献でも、ソ連研究はやはり政治史中心が多いこともあり、社会史的なアプローチを持ちつつ政治史を論じる、という本書の手法が取りにくかった。いつか、現地でリサーチ・アシスタントを見つけて自ら研究を進めるか、それともロシアに研究者仲間を作って共同研究を行うか、そのどちらかでもできればいいと思う。

## 6. 他の地域についてはどうか：韓国

渡辺さんが興味を持ったように、韓国についても同じような観点から歴史の見直しを図ることができるかもしれない。つまり、冷戦的対立と見なされてきた出来事のなかにも、社会的抗争や文化的対立、または歴史的軋轢などという側面を見ることができるのではないか、ということだ。実際、第二次世界大戦後の世界において、朝鮮半島、そして韓国社会ほど激烈な社会変化を経験していた地域もなかなかないだろう。それは、くだんの済州島に最もよく当てはまる。というのは、日本植民地時代ののち、済州島には何千、何万もの島民が日本から戻ってきたばかりだったからだ。周知のように、植民地時代には多くの島民が日本に渡っていた。とくに大阪——私の生まれ故郷——では、済州島民が当地朝鮮人の大半を占めていたぐらいだ。

そこで、戦前の大阪における激しい朝鮮人労働運動の歴史や、それらへの朝鮮人女性の積極的な参加を考えてみればいい。こうした者たちが戦後、そうした習慣や文化、そうした社会運動のあり方、またそうしたジェンダー概念を、島に持ち帰っていたとしたら一体何が起きるだろう。また、大阪から済州島へ戻った人びとが、どのような眼差しを現地の人に向けたか、またそれが現地の人びとの目にはどのようにうつ

たのか想像してみればいい。さらに、そうしたすべてが同島における社会変化の萌芽となり、また同時に社会的緊張の火種となったとしても、そしてそれが朝鮮半島の他地域よりも激しい度合いで起きていたとしても、とくに驚くことではないように思う。

このように見てみれば、くだんの済州島4・3事件も、イデオロギー対立の図式を越えて描けるかもしれない。そこで繰り広げられた大量殺戮も、「国家権力」と「民衆（島民）」の図式を越えて見直せるかもしれない。こうした見方を私のオリジナルだと言うつもりはまったくない。事実、こうした見方は、以前から指摘されていることだ。とはいえ、こうした視点からの研究が実際にそれほど進んでいるだろうか。私は2021年6月、「済州フォーラム」に招かれ、そこで「4・3事件、世界冷戦と平和」というパネルに出席、『『社会戦争』視点から虐殺事件を再考する』と題する発表をした。ただ、やはりというべきか、私以外のパネリストは全員、同事件をイデオロギー対立の結果として描くもので、その延長として米国の責任を追求し、謝罪を求めようとする発表もあった。

もちろん、そうした路線の研究もどんどん追求すべきだと思うが、それだけでは「権力 vs. 民衆」モデルを強めてしまい、結局「権力」を中心とする歴史観を強めてしまうだろうし、また、同じように、米国批判の度合いを強めれば強めるほど、逆説的に米国中心的な歴史観にはまり込んでいくように思う。それぐらいなら、むしろ、植民地時代から続いてきたであろう、当地の人びとの間におけるさまざまな社会的抗争や文化的対立、または歴史的軋轢に光を当てるほうが、島民たちを主人公にした歴史を書くことへの貢献となると思う。この件に関して、いつか済州島にリサーチ・アシスタントを見つけるか、または研究者仲間を作って将来の共同研究を行うか、そのいずれかでもできれば

いいと思う。

## 7. 味方でなければ敵なのか

藤井さんの書評にはかなり面食らった。戸邊さん、渡辺さんの質問や批判が、本書読了後の彼らの興味や関心から出てきているのに対して、藤井さんのものは単に筆者を言い負かそう、おとしめようとする目的から発せられたように感じられたからだ。私自身は勝ち負けには興味がないし、そもそも、私を言い負かすことに何の意味があるのかよく分からない。さらに私を戸惑わせたのは、藤井さんの批判が、「私」や「本書の議論」に対する批判というよりは、「藤井さんが思い描く私」や「藤井さんが思い描く本書の議論」への批判のように思えたからだ。言い換えれば、なにか勘違いや思い込みをされたまま批判されているように思えた。

最大の謎は、藤井さんと私という、本質的なところではかなり似通っていたり、問題意識を共有していたりする二人であるにも関わらず、どうしてまたそこまで敵対的になる必要があるのか、という点だった。たしかに、WINC というグループ内においては、私はやや異色かもしれないし、藤井さんとの距離もあるのかもしれない。しかし、広く社会一般という視野から眺めてみれば、その違いなど些細なものに過ぎないと思う。下記に若干の解釈上の違いについて一応、私の考えも述べておくが、それらにしても、単なる見解の相違に過ぎず、とりたてて敵対するほどのことでもないように思う。

言い換えれば、本来ならば、別のかたちで何らかの「共闘」でもできそうなものなのに、どうして「内ゲバ」のように相手を叩きつけなければならないのかよく分からない。こうしたことを繰り返せば、結局、広い社会の人びと、また海外の人びとも含めた読者も、どんどん私たちから離れていって、もっと「分かりやすい」「心地よい」歴史観に吸い込まれていくだろう。

実際、それが過去数十年のうちに世界各地で起きたことではないのだろうか。私たちが目指すべきは内側で殴り合いに興じるのではなく、外に向かって、真摯でかつ魅力のある歴史なり学問なりを発信していくことではないのか、と思う。

私には、藤井さんが何かを背負いすぎているように感じられた。それが何なのか私にはよく分からない。ただ、その彼が背負っているもののせいで、私が何かを背負っているように見え、それゆえに激しい非難になったのではないか、と思う。言い換えれば、藤井さんと私は、個人としては向かい合っていないような気がする。藤井さんには、背負い込んでいるものを肩から降ろして、一人の個人として本書を読んでみてほしいと思う。そうすると、おそらく、「敵」「味方」の二分法に陥らずに、実は、さまざまな問題意識なりを共有していることにも気づいてくれると思う。

## 8. 「総力戦世界」と「冷戦世界」

ここに藤井さんの指摘に対する私の考えも簡単に述べておく。藤井さんは冒頭で、「実は冷戦こそが総力戦経験を飼いならすための装置であったという観点が（本書には）示されている」と述べ、「総力戦と冷戦の、本質的と言っていいであろう差異を本書は示している」としたうえで、その点が「いささかあいまいに扱われているのではないか」と批判している。

ただ、これは藤井さんの理解であって、そもそも本書の立場ではない。藤井さんにとっては総力戦の経験とは「人民の武装」、そして「主体化の契機」を意味するようだが、私にとってはそれほど単純なものには思えない。もちろんそれは本書の範疇外のトピックであり、本書では論じていない。ただ、私が「総力戦世界」と「冷戦世界」を並列に並べたのは、私にとっては、その両者に、むしろ共通性を感じるのである。

一つ目は言うまでもないことだが、ともに、前線の兵士だけでなく、国民全体が「戦闘員」化するに至った世界であったこと、二つ目はその過程に、ともに社会保守的な作用があったと思えることだ。

この点は、「総動員体制」の名のもとで、どういった人びとが脇に追いやられ、どういった人びとが勢力を増したのか、ということを考えてみれば明らかになると思う。日本を例に取っていえば、総力戦体制下の街角でやり玉に挙げられたものといえば、洋服にショートスカート、ネオンサインにカフェ、パーマ。「モガ」やエロティック・カフェは、挺身婦人隊や国防婦人会に駆逐され、ナンセンス歌謡は生真面目な軍歌に取って代わられた。マルクスボーイや文学青年、メンズファッションも、「男らしく」「たくましい」兵士像に駆逐される、という具合だ。また、朝鮮人や部落民それぞれの権利運動にしても、1920年代を彩った急進的な初期権利運動は抑え込まれ、総動員体制に協調することでの、より保守的なかたちでの改革と解放、そして秩序と調和を重視するかたちでの差別との闘いが始まることになる。

そのように見てみると、総動員体制とは、単に国家の動員とプロパガンダによるトップダウンの産物でもなければ、また単にボトムアップ的な「人民」の「主体化の契機」でもないように思われる。むしろ、さまざまな立場の人びとが、愛国と国防の名のもとに、それぞれの「内部の敵」（あるいは内部の競合者）を黙らせ、社会の「浄化」に励んでいたとみることもできると思う。そこで「敵」と見なされたものは、たとえば「個人主義」であったり、「行き過ぎた西洋主義」であったり、またそれに付随する社会規範やジェンダー規範の「乱れ」だった。つまり、端的に言えば、のちの「冷戦世界」と同様、人びとは、それぞれなりの「社会戦争」を非常事態の名のもとに闘い、1920年代を通して生まれ出

ていたさまざまな新たな生き方や、新たなアイデンティティを封じ込めていた、ということになる。

しかも、程度の違いこそあれ、同じような1930年代の「反動」は、米国でも、中国でも、おそらくドイツやイタリアでも見られるのでないかと思う。そこで非難の的となったのは個人主義であったり、規範の乱れであったりしたし、そこで称賛されたのも、秩序や調和、また伝統的家族の概念や「男らしさ」の規範だったのだから。ゆえに、私はそもそも、「総力戦世界」と「冷戦世界」の間に本質的な差異があったとは思ってないし、「冷戦こそが総力戦経験を飼いなすための装置であった」とも思っていない。もちろん、藤井さんの見解自体はそれ自体としては議論可能なものであり、彼自身にそれをもっと展開していつてもらいたいと思う。私としてもこのテーマは、次作の『社会戦争の時代戦争と占領の社会経験から考える』（仮題）でより深く考えていきたい。

## 9. 解釈上の相違：中国、台湾、韓国

藤井さんは、本書の中国、台湾、韓国についてのいくつかの点についても激しい批判を繰り返しているが、それらにしても、単に、歴史解釈上の見解の相違に過ぎず、それほどヒートアップするほどのことでもないように思う。

まず、中国共産革命とその後の三反運動などが議題に上がっているが、私にしてみれば、本書が主に1世代前の先行研究に対抗しているのに対し、突然、2～3世代前の研究者から石が飛んできたような気になった。この短い書評を読む限りでは、藤井さんは、中国共産革命を「新たな社会を創り出す過程」「人民を主体とする国家を作り上げるプロセス」というようになりかなり称賛気味に捉えていることが分かる。これは、1960年代から1980年代にかけて主流だった見方のように思われる。当時は、その「人



民」たちの参加が、果たして「革命的情熱」から来るものなのか、或いは「土地改革」などから得られる実際的な利害判断から来るものなのか、という議論がなされていた

ただ、1990年代なかば以降、こうした議論は姿を消し、むしろ、「人民」ではなく、いかに中国共産党が動員とプロパガンダを駆使して「革命」を作り上げていたか、そして人びとはいかに無理矢理にそれに従わされていたか、また騙されていたか、といった論調が広まるようになったように思う。本書はそうした1世代前の議論に対して、中国共産党もそこまで絶対的な力を持っていたわけではないこと、また人びとも単なる動員とプロパガンダの手先などではなく、それぞれなりの主体的な参加なり、不信なり、無関心なり、さまざまな対応があったことを示している<sup>8</sup>。そして、そうした「社会で何が起きていたか」を検討することから見えてきたものが、意外に社会保守的な性質だった、というのが本書の立場となる。

例えば、藤井さんが提示した図版〔本誌148頁掲載〕にしても、そこには、都市部の贅沢や怠惰、享楽主義や個人主義——言い換えれば、あからさまに西洋化された振る舞い——の代表格とされた「不法商人」「貪汚分子」が非難されていることを見て取ることができる。ゆえに、私にしてみれば、これらの図版は、そうした「内部の敵」を駆逐し、社会規範やジェンダー規範の「乱れ」を正そうとする社会「浄化」運動の啓発の流れとして位置づけることができると思う。

とくに2枚目のものはジェンダー規範の保持という点でも興味深い。女性は「貪汚」トラに殴りかからんとはしているものの、実際にそのト

ラを突き刺しているのは、逞しい男性労働者であって、女性ではない。こうした構図は、じっくり研究すれば、もしかしたら面白いかもしれない。たった今、ふと思い出したが、当時の鎮圧反革命運動に有名なポスターが一つある。それは、子どもを抱えた女性が「反革命分子」を告発するものだが、ここでも実際にそれを捕まえるのは女性ではなく、男性人民軍兵士だ(下図参照)。



この構図は、本書で紹介した米国・市民防衛プログラムの一環として制作されたショートフィルムのものでなくもない。「インディアンたちが襲いかかってきたとき、男は防護柵に駆け付け、女はライフル銃に弾薬を装填し、年長の子どもたちは幼子らの世話をしたものだ」という

<sup>8</sup> 本書で、「朝鮮戦争期の中国政治や政策立案過程を分析した既存文献においては、普通の人びとの声や振る舞いなどが言及されること自体稀だった」理由として、「おそらく私たちが一般的に抱いている中国共産党に対するイメージ」、すなわち「強大な権力を持つ共産党が人びとの考えを抑え込み操作していたに違いないというもの」(129)と述べているが、ここで言及している既存文献とは1990年代以降のものを指している。それ以前には、朱建榮、陳兼、沈志華、また欧米の研究者らが展開したような詳細な分析はそもそもなかった。ゆえに、藤井さんがここで1950年代の日本における中国へのイメージを持ち出すのは議論が噛み合っていない。

くんだりだ<sup>9</sup>。「インディアンたちが襲いかかってくる」ことを思い起こして市民防衛を訴えるという論理自体、最初から問題含みだが、ここで問題にしているのは、結局、外で戦うのは「男性」であり、「女性」はそれを支えるもの、とする伝統的なジェンダー役割が保持されている点だ。

そうしたことを念頭に置きながら、再度、藤井さんが提示した2枚目の図版を見てみると、一見、政治的には革命的立場に立っているようでありながらも、社会・文化的な側面では、やはり保守的な要素をみることができると思う。実際、こういった指摘はとくに珍しいものではない。例えば、中国ジェンダー史家のスーザン・マンは、中国共産党政権下で進められた女性政策は、個人としての女性解放やジェンダー平等を推し進めたものではなく、安定的な家族制度の復活と堅持を狙ったものだったとしている。それによって家族を基盤とする社会秩序を作り上げる、というわけだ。その流れのなかで、一夫多妻制や婚外交渉、性産業市場、同性愛、また離婚は、撲滅ないし否定的な扱いを受けることになる。こうした側面については、スーザン・マン『性からよむ中国史 男女隔離・纏足・同性愛』（2015）やジュディス・ステイシー『フェミニズムは中国をどう見るか』（1990）などに詳しい。

また、第二次世界大戦後の台湾社会と韓国社会で起きていたことに関する見立ても、たしかに藤井さんと私とでは、やや異なるようだ。ただ、それは、何に焦点をあてて判断するか、の違いにすぎない。例えば、藤井さんは、「台湾現代史の通説として蒋介石が軍事的な大陸反攻を諦め経済建設へと方向転換するのは1958年のこと」として、朝鮮戦争中にそうした台湾内部における地盤固めや経済建設が進んでいた、という本書の議論に疑問を呈している。ただ、見ているところが違う。藤井さんのように

トップダウンの決断をもって時代区分を為すならたしかに1950年代後半になるかもしれないが、私のように社会で実際に何が進んでいたかという点を重視すればそれは朝鮮戦争期までさかのぼる、ということに過ぎない。同時期における台湾建設の動きや、国内秩序・体制の形成については、若林正丈『台湾 変容し躊躇するアイデンティティ』（2001）や伊藤潔『台湾四百年の歴史と展望』（1993）にも触れられている。

また、韓国の状況についても、拙著が、「朝鮮戦争も、韓国において『国民』と『ナショナリズム』を創り出し、かつ強固なものに仕立て上げるという」役割を担ったと述べたのに対し、藤井さんは「朝鮮戦争がそうした役割を担うことになるのは1960年代以降のことで、50年代後半において朝鮮戦争がもたらしたのはむしろ脱ナショナリズムだった」としている。また、これを「米国が韓国のナショナリズムを警戒した結果」としている。ただ、これも見ているものが違う。藤井さんが指導者層や米国の影響を念頭に置いているのに対し、私は、当時、社会で起きていたことや人びとの反応を念頭に置いている。本書で引用した金聖七の日記からも、金本人や周囲の人びとの「国民」意識が、戦争中にいかに醸成されたかを伺えると思う。また、朝鮮戦争が、いかに大韓民国という国家を作り上げたかについては、金東椿『朝鮮戦争の社会史 避難・占領・虐殺』（2008）に詳しい。

## 10. 沈黙した人びとをどう描くのか

藤井さんの書評で、唯一、興味深いと思ったのは、「圧倒的な暴力が支配するなかで沈黙を選択した人々の存在をいかに捉えるべきか」という問いかけだった。これは『週刊金曜日』に掲載された書評で、金井良樹さんが、「苛烈な植民地支配を経験した人びとに対する『分

<sup>9</sup> 益田肇『人びとのなかの冷戦世界：想像が現実となるとき』岩波書店、2021年。239頁。

析』には、もう少し配慮が必要と感じる部分もあった」と書いた心情にも繋がるものだと思う<sup>10</sup>。

ただ、この点に関して、「歴史家はこのように捉えるべき」という便利な答えはありえない。というのは、歴史家がそれをどのように書くべきかは、純粋にその歴史家が何を論じたいか、何を描きたいかによるからだ。つまり、そうした沈黙を選んだ人びとの側に立つ歴史を書くのが目的なら、そしてそうした人びとの「声にならなかった声」を掘り起こし、伝えるのが目的なら、そういう人びとを「不参加というかたちで『参加』していた」と論ずる本書の立場は、たしかに無神経なもの目に映るかもしれない。

私はそういった仕事をする歴史家を応援しているし、そうした仕事はもっと進められたらいいと思っている。ただ、本書に関して言えば、そもそもそうした「誰か」の側に立った歴史を目指していない。もちろん本書は「人びと」の歴史を書くことは目標としているが、一読すれば分かるように、本書は「人びと」の側に立った歴史ではないし、ある一定の国なりグループなりの立場に寄り添ったものでもない。

いま振り返ってみれば、本書が目指したのは、繰り返し述べるように、やはり「社会で起きていたことを描写することで、それが何だったのかを考える」ということ、具体的には、冷戦世界なり、その世界観に基づいたさまざまな社会的粛清が、どのように国家と民衆の相互作用によって作り出されていたのかを描くこと、そして究極的には、本書が最後に述べたように、政治指導者だけでなく、「私たち自身も日常レベルにおける権力者」なのではないか、と伝えることだったように思う。

そうした観点からしてみれば、たとえ無神経に見えたとしても、「不参加というかたちでの『参加』」があったこと、もっとわかりやすく言え

ば「見て見ぬ振り」や「何もしない」という不作為であっても、積もり積もれば何らかの意味を持つことがある、と指摘することにはそれなりの意味があると思う。

## 11. おわりに：個人として歴史を書く

この点は、「『わたし』はどのような位置から歴史を見ているのか」という藤井さんの最後の問いかけにも関係しているように思われる。その答えを先に述べると、「私は、私個人という位置から歴史を見ている」というものになると思う。それがどういう意味かを説明するために、私が歴史をみるさい、つまり、史料を読む際に、どう感じながら読むことが多いかを少し述べてみたい。

「敵・味方」思考で物事を眺める人には分かりにくいかもしれないが、私はどんな史料を読んでも、個人として何らかの共感を覚えることが多い。とくに意識的にそうしている、というわけではない。ただ、そうなることが多い。例えば、差別や抑圧を受けてきた人びとや、何らかの既存の規範から踏み出そうとする人びとが書いた手紙。そういった史料を読むと、たしかに強い共感を覚える。そうした人びとに対するシンパシーは本書からもすぐに感じられると思う。

ただ、同時に、例えば、アラスカの僻地に住む9人の子どもの父親が「(子どもたちに)法に則った秩序だった社会で育ててほしい」というシンプルな願望で「反共主義」を唱える手紙を読むと、それもそうかもな、とふと思ってしまう。そうかと思うと、自らが共感するような特定の個人や集団に対してでも、全面的な共感を覚えることもまずない。

そう考えてみると、それが、私の書く「人びとの歴史」と、いわゆる民衆史や社会運動史との違いなのかもしれないと思う。誤解のないよう

<sup>10</sup> 金井良樹『『普通の人びと』の営みが戦争を作り上げる』『週刊金曜日』9月24日号、54頁。



に言うておけば、私自身は民衆史や社会運動史が好きだし、例えば、鹿野政直や道場親信の著作や資料集には多大な恩恵も受けている。実際、何らかの影響も受けていると思うし、そうした研究はもっと進められるべきだとも思っている。ただ、私自身が調べて書くとなると、どうしてもその枠組みに収まりきれない。それは、おそらく私がそうした「民衆」や何らかの「運動」に成り代わって歴史を書くという回路を、意識的にか、無意識的にか、避けているからだと思う。また、それは、究極的には、私は、誰かのための歴史を書こうとしているのではなくて、個人から個人へと届くよう歴史を書きたいと思っているからだと思う。

\* \* \*

ここ20年ほど、世界各地で内向きの政治が進んでいる。その間、私は、日本や米国、中国、シンガポールに住み、各地におけるそうした社会情勢を横目に見ながら、そして戸邊さんが指摘するように、そういった状況に危機感を抱きながら、この本を書いたのだと思う。今日、「よそものによって、我々の生活や調和が脅かされている」という意識が各地で人びとのところを掴み、それぞれの社会がそれぞれなりの「壁」をまた築き上げようとしているさまを見ていると、世の中の少くない人びとは、やはり「壁」がある世界のほうが好きなのか、「壁」の向こうを探索するよりもそのなかで過ごすほうが心地よいのか、と不思議な気持ちがする。

そうした今の状況に強い既視感を覚えるのは、私だけではないだろう。実際、この本のなかで読者が目の当たりにするのも、いかに世界各地の人びとが「冷戦世界」という大きな物語を取り込むことで個人と個人が話す回路を持たない世界を作ってしまったのか、また、いかに「他者」が未知の「個人」でなく、単なる「敵」

であるかのように見える世界が生じてしまったのか、といったことだからだ。

だからこそ、今のような新たな「壁」が築かれつつあるこの時代に、あくまで一個人として歴史を眺め、国境や国籍、民族や信条や立場を越えて、個人から個人へと届くような歴史を書こうとする試みにも、何らかの意味があるはずだ、と思っている。